
† † PERSONA × BLADE † †

深浪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

††PERSONA×BLADE††

【Nコード】

N9439G

【作者名】

深浪

【あらすじ】

誰かの気まぐれか、はたまた必然か。二つの世界は繋がった。少女が蝶になった夢を見てから日常は崩れ始める。影時間・シャドウ・ペルソナ。仮面と剣を手に少女…川添珠姫が見る景色とは？

プロローグ（前書き）

この小説は、PERSONA3とBAMBOO BLADEのクロスオーバーです。

オリジナル・ネタバレ要素満載です。キャラに寄っては空気になる可能性が高いです。

それでは仮面と剣の世界をお楽しみみてください。

プロローグ

あるとき、私は蝶になった夢を見た。

「あれ…？あたし、飛んでる…？」

そこは”蝶”にとって見覚えのない景色だった。

天を仰げば緑色の空、足元には赤い血だまり。

…あまり気持ちのいい景色ではない。

『よく来たね。』

「え…？」

蝶の目の前に、囚人服のようなものを着た少年が佇んでいた。

『君は、随分イレギュラーな存在みたいだ。』

「イレギュラー…？」

『そんな怖がらないでよ。僕は君と友達になりたいんだ。そして彼を助けてあげて欲しい。』

「彼って…」

蝶は少し警戒を解いた。

『僕のとてとても大事な友達なんだ。今の彼は忘れてしまっているけど…。』

少年の言葉に憂いが含まれる。寂しくて、悲しい。そんな感情。

「…あたしに出来ることなら、やる。」

一時の感情ではなく、心からそう思った。

誰かの為になりたい、それが蝶　いや、彼女の信念だから。

『　　ありがとう。』

「……マちゃん、タマちゃん！」

「ん…ユージくん？」

「あ、やっと起きた。教室でうたた寝なんかしてたら風邪ひくよ?」

「も、もう放課後…?」

「そうだよ。部活行かないの?…もしかして具合でも悪い?」

「大丈夫…。ただ、変な夢みちゃって。」

「怖い夢?」

あれ?思い出せない。

「…とりあえず、部活行こう。」

「そうだね、キリノ先輩達が待ちくたびれてるよ。」

この夢が、あたしの　　あたしたちの非日常の始まりだった。

プロローグ（後書き）

初めまして。進弥と申します。

ペルソナ3とバンブレのコラボって他にやってる人いないのかな…。

いたら是非教えて頂きたいです。

因みに僕はキリノとゆかりッチが好きです。中の人と同じなのは偶然です

早くペルソナキャラと絡ませたいです！

第1話・日常と隠された非日常（前書き）

思った以上に時間がかかってしまいました。

主人公とSEESメンバーがようやく登場？って感じですよ。

ではお楽しみください。

第1話・日常と隠された非日常

その日の部活も、いつもと変わりなく終わった。

「タマちゃん、なんか今日元気ないね？」

「キリノ先輩…。」

「なんかあった？」

キリノ先輩は心配そうにあたしの顔を覗きこんだ。

「そ、そんな大したことじゃないんです。ただ変な夢を見た気がするんですけど…。」

「夢？」

「はい。誰かに呼ばれたというか、話したというか…。」

「呼ばれた、ねえ。」

キリノ先輩は試合の時にも見せない、怖いくらい真剣な表情をしていた。

「ねえタマちゃん。自分を呼ぶ”声”が聞こえたのかな？」

「声、ですか？」

「ほら、今お隣の港区で”無気力症”が流行してるでしょー？あれって自分を呼んでるようなへんな声を聞いた人になるらしいから。」

∴自分を呼ぶ、声？

「確かに、呼ばれたような気もしますけど…。」

自分でもよく分からないけど、何処か違うような気がする。

「キリノ、あんた随分詳しいじゃん。」

サヤ先輩が会話に加わってきた。

「んー∴月光館学園に親戚が通ってるから。少し話聞くんだけ。」

「へえー。」

無気力症　　口も利けない程の無気力状態に陥り、通称影人間とも呼ばれる。

「!?!」

どうしてだろう。

今まで全然知らなかったし興味なかった筈なのに、こんなスラスラと頭の中に思い浮かぶなんて…。

「タマちゃん?どっただの?」

「さ、サヤ先輩…。なんでもないです。」

…なんだか、嫌な予感がする。まるでブレイドブレイバーがデスアーマーに追い詰められていくような。

「タマちゃん、帰らないの?」

「ユージくん…。今行く。」

…多分気のせいだ。

自分にそう言い聞かせ、あたしはユージくんを背中を追った。

だけど。とても大切な約束をしたような、そんな気がした。

危険かもしれない。

千葉紀梨乃は去り行く珠姫の小さな背中を見つめた。

「うーん…考えすぎだと思っただけだねえ。」

いつもの猫口になり、曖昧な笑みを浮かべた。

「キーリノ！帰らないの？」

「ごめんサヤ、ちょっと用事あるから先に帰ってて！」

「え？あ、分かった。じゃーね！」

「ばいばいー！」

鞆子が去っていくのを見届け、紀梨乃は携帯を取り出した。

「もしもし。千葉ですけど、頼みたいことがあって…」

『君から頼み事か？珍しいな。』

「あはは、そうですね。実は…」

紀梨乃は電話を切ると、早足で学校を出た。

「さてと…あたしも行きますか。」

月光館学園巖戸台分寮、ラウンジ。

「…ふう。」

「どうかしたんですか？桐条先輩。」

僕は溜め息を吐いている彼女　桐条美鶴が気になり話しかけた。

どうやら先程まで電話をしていたようだけど。

「ああ、有里か。先程”彼女”から電話があつてな…済まないが今夜の影時間は遠出してもらつことになりそうだ。」

「キリノに何かあったんですか!？」

近くで話を聞いていたらしい岳羽さんがやって来た。

「いや、そうではない。どうやら千葉の後輩が”呼び声”を聞いた可能性があるらしい。」

気がついたら山岸さん、伊織、真田先輩も来ていた。

6月現在、寮内にいる”特別課外活動部”全員がラウンジに揃う。

「夏紀ちゃんみたいにですか!？」

「オレらで守ってやりゃーいいんだろ？」

「…しかし美鶴。直接寮に来てもらうほうがいいんじゃないか？」

「それもそうだが 勘違いでした、じゃ言い訳がつかないだろう?」

それもそうだ。

それに…勘違いであるほうがその子にとっても幸せだと思っ。

何故だかそんな気がした。

その日も、いつもと変わらない日が続く筈だった。

いつものように学校へ行き、部活へ行き、お父さんの道場を手伝い、夕飯を食べ、お風呂に入って、録画したアニメを見て、いつものように就寝した…。

それなのに。

「なに…これ…」

6月だというのに、嫌な気配というか悪寒で目を覚ました。

なんとなくカーテンを開けてみると信じられない光景が広がっていた…。

どんよりとした緑色の空。赤い血溜まり。

どこかで見たような気がする…。

「父さんは…!?!」

心配になり、一応竹刀を持って父さんの寝室に向かおうと…。

「っ!?!」

赤い棺桶のような物があるだけで、誰もいない。

「そつだ、誰かに…」

ポケットにいれてきた携帯を取り出し、驚愕する。

「動いて…ない?」

携帯だけではなく、家中の機械が止まっていた。

「外の様子を見に行ったほうがいいのか…」。

竹刀を握りしめ、一応パジャマから私服に着替えて、覚悟を決めて外へ出る。

「…一体、なんなの…?」

その時だった。何かの気配を感じ、身構える。

「タマちゃん、あたしだよ。」

その声は…。

「き、キリノ先輩?」

「大丈夫?どこもケガしてない?」

「はい、大丈夫です。」

そう言うと安心したようにキリノ先輩は笑った。

「千葉さん!」

不意に誰かの声が聞こえ驚く。

「大丈夫、敵じゃないよ。」

予想以上に、あたしは怖かったらしい。

… かつこわるいな。

「有里君。一応、保護できたって感じかな。」

「そうか…。桐条先輩がいう所の”適正者”ってことかな？もう少
しで真田先輩と岳羽さんと伊織も来るよ。イレギュラーが近くで出
たからそっちに手がかかってね。」

「イレギュラー？そっか この辺はあんま出ないのにな…。」

有里、と呼ばれたその人に強烈な既視感に襲われた。

「…こんばんは。」

「え、こ こんばんは。」

見つめていたからか声をかけられ、慌ててしまう。

「影時間が明けるまであたし達が守るから。」

影時間…？

「なんて悠長に構えてられないみたいだね、千葉さん。」

有里さんが鋭い声で言い放つ。その視線の先には異形の存在。

「シャドウ!!」

キリノ先輩の言葉に、あたしは知らず知らず竹刀を握りしめていた。

さあ もう一つの”可能性”「ものがたり」が始めるよ。

第1話・日常と隠された非日常（後書き）

どこで区切るか迷いましたが、影時間到来までにしました。

次回はどうぞよろしくかしら。

タイトルはバンブレっぽく〜って感じにしようと思います。

では近い内にお会いできることを祈りつつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9439g/>

††PERSONA×BLADE††

2010年10月10日15時47分発行